

19世紀小説から『ユリシーズ』へ —— フローベール、トルストイ、ジョイス

新名 桂子

From Nineteenth-Century Novels to *Ulysses*:
Flaubert, Tolstoy and Joyce

Keiko SHIMMYO

1922年の『ユリシーズ』の出版が当時の読者にどれほどの衝撃を与えたかは想像に難くない。『ユリシーズ』以前の小説との断絶からくるこの衝撃については、言語の革命としての観点から、あるいは前衛的な文体や語りの技法の観点から、すでに多くのすぐれた研究がなされているが¹、私の興味はむしろ物語内容に即したものである。『ユリシーズ』は、第一義的にホメロスの『オデュッセイア』のパロディとして説明されることが多く、その場合、象徴的な意味での父と子の出会いの物語としての面が強調される²。しかし、19世紀小説から20世紀の『ユリシーズ』への飛翔には別の説明が必要であろう。本論は、『ユリシーズ』を19世紀小説のパロディとして捉えることにより、この小説の革命性を物語レベルで説明する。

Tony Tannerは、『*Adultery in the Novel* (1979)』において、19世紀小説の主要なテーマが結婚の侵犯行為としての姦通であることを指摘しているが、同時に、19世紀小説の特徴として実際の姦通行為が直接描写されることがなく間隙や沈黙によって示されることをあげている³。そして、その後継として二つの流れがあるという。ひとつは、ロレンスの『チャタレー夫人の恋人』に代表されるもので、性行為が描かれるようになるということ。もうひとつは、ジョイスの『ユリシーズ』に代表されるように、性行為が倒錯的なものになってしまっているばかりでなく、家庭や社会の問題が極端な「言語性」(“linguicity”)⁴の追求に飲み込まれてしまっているということである。タナーは、ロレンスとジョイスを並置しているが、『チャタレー夫人の恋人』の出版は1928年なので、『ユリシーズ』の出版の方が早い。こうしてみると、1922年の『ユリシーズ』の出版こそが、小説にとっての重要な転換点であったと言えるだろう。この観点にのっとって、19世紀姦通小説と『ユリシーズ』の関係を具体的に検討し、19世紀的な意味での姦通小説が成立しなくなったことと『ユリシーズ』との関連を明らかにしたい。ただし、19世紀姦通小説を網羅的に取り上げることは本論の限界を超えており、フローベールの『ボヴァリー夫人』(1857)とトルストイの『アンナ・カレーニナ』(1878)に対象を絞る⁵。二つの小説が、19世紀小説の代表的傑作であるばかりでなく、Frank Budgenも報告するとおり、フローベールとトルストイに対するジョイスの高い評価が明らかであり⁶、これらとの比較が『ユリシーズ』の特徴を浮き彫りにすることになるだろうからである。

分析に先立ち、『ボヴァリー夫人』と『アンナ・カレニナ』に共通する点を確認しておく。第一に、夫婦間に真のコミュニケーションが成り立っておらず、問題のある結婚生活であること（ただし、カレニン夫妻の場合、当初問題は潜在的である）、第二に、婚外の情熱的恋愛である姦通が、一時的には結婚の問題を解決するよう見えること、第三に、最終的には姦通も結婚の問題の解決にはならないこと、第四に、妻の不貞行為の代価が彼女自身の悲劇的な死（エマ・ボヴァリーは服毒自殺、アンナ・カレニナは鉄道への投身自殺）であること、である。この大枠は共通点として押さえながら、以下にそれぞれの小説ごとに、夫とブルーム、妻とモリー、妻の愛人とポイランの比較を行い、それぞれの小説に描かれる恋愛の三角関係がどのように変化・発展して、『ユリシーズ』となっているかを見てゆく。

I. 『ボヴァリー夫人』と『ユリシーズ』

『ボヴァリー夫人』は、平凡な田舎医者シャルル・ボヴァリーの美しい妻エマが、夫から溺愛されているながら二人の男性と道ならぬ関係になり、最後は借金を苦に服毒自殺するという物語である。ブルーム、モリー、ポイランの三角関係に対応するのは、シャルルとエマとエマの最初の愛人口ドルフである。

i. シャルルとブルーム

まず、シャルルとブルームの対応をみる。シャルルとブルームの距離は近い。シャルルが、妻を盲目的といってよいほどに愛している点、善良ではあるもののあまりさえない夫である点、世間との交流がそれほどあるわけではない点は、ブルームにほぼそのまま引き継がれている。

たとえば、新婚早々のシャルルの有頂天の気持ちは次のように語られる。

さていまは心からうちこんだこの美しい女をもう一生自分のものにすることができたのだ。彼にとって、世界は妻の着る手ざわりやわらかなあたりにもうかざられたようなものだ。愛情が足りないかと気にやみ、何度でも妻の顔が見たかった。いそいそでも一度家にひきかえし、胸をドキドキさせて、階段をあがった。エマは部屋でお化粧中だ。忍び足で近づき、背中にキスした。彼女は声をあげた。(B 43)

このあたりの妻への愛情は、ブルームにも共通する点がある。シャルルが、地方の、とはいえ医者であって、それなりの社会的地位を持っていることは、しがない広告とりのブルームとは違う。また妻の恋愛事件に気付いているかどうかという点では、その明敏さにおいてブルームのほうに軍配があがるが、それでも、妻への愛情という点からは、シャルルはブルームの原型のなかでも非常に近い関係にあるもののひとつと言える。

ii. エマとモリー

では、エマとモリーの関係はどうだろうか。エマとモリーの距離も近い。エマは、夫婦関係に不満を持っている点、不貞に罪の意識を持っていない点において、程度や質に少々差はあるものの、モリーと似ている。エマの結婚生活への不満は、次のように描かれている。

結婚するまでエマは恋をしているように思っていた。しかしその恋からくるはずの幸福がこないで、あたしはまちがったんだ、と考えた。至福とか情熱とか陶醉など、本で読んであんなに美しく思われた言葉は世間では正確にはどんな意味でいっているのか、エマはそれを知ろうとつとめた。(B 43-44; 強調原文)

でもシャルルさえその気になれば、こちらの気持ちを察してくれたら、ただ一度でも彼女の考えていることに心をあわせてくれたら、手をのばせば熟した収穫期の果実が木から落ちるように、この胸から急にあふれる気持ちがそのまま流れ出ていっただろう、と思われた。しかし、夫婦の生活がしたしさをまずにつれ、心そのものはへだたりができ、夫から彼女をひきはなして行くのだった。

シャルルの話は歩道のように平凡で、月並みな考えがふだん着のままそこを行列して行った。なんの感動もあたえず、笑いも夢もさそわなかった。—— (中略) ——

彼は妻を幸福だと信じていた。そして、妻のほうでは、夫のこの落ちつきかた、少しの不安もない愚鈍さ、彼女があたえている幸福をさえ、うらめしく思っていた。(B 50-51)

このように、エマとシャルルの間に、真の意味でのコミュニケーションが成り立っていない様子が明らかである。特に、エマのほうに夫への不満があるのだが、シャルルはこれに全く気付いていない。これに比べると、モリーは、夫についてエマほど辛らつではなく、夫のよい面にも気付いている。ブルームもシャルルほど鈍感ではなく、妻の不満を理解している。結婚生活に問題があることはいずれの夫婦も同じだが、このように差があるのも確かである。

不貞への罪の意識のないことについては、たとえば、ロドルフと初めて密会を持ったあとのエマの意識は次のようなものである。

《恋人がある!あたしに恋人がある》と彼女はくりかえした。この考えは、二度目の青春がよみがえってきたうれしさのようにたのしかった。やっと、恋のよろこび、むなしくあこがれていた幸福の熱情をこれから自分のものにできる。—— (中略) ——

それに、エマは復讐の満足を感じてもいた。いままでずいぶん苦しんだじゃないか。が、いま勝った。長いあいだおさえてきた恋が、たのしく沸騰してすっかり一度にわき出した。もうなんの自責も、不安も、心配もなく、この恋を味わっているのだ。(B 202-03)

エマがこの恋愛について罪の意識を感じていないのは、この言葉から明らかで、これは、その後、彼女の死に際してさえも変わることがない。

モリーも、ボイランとのデートに特に罪の意識を持っておらず、この点はエマと同じである。ただし、ボイランとの関係をエマのように美化せずに、彼への不満を次のように表明している。“...one thing I didnt like his slapping me behind going away so familiarly in the hall though I laughed Im not a horse or an ass” (U 18.122-23)。このように、エマの罪の意識のなさはモリーに引き継がれているが、エマの恋への妄信と熱中の方は引き継がれていない。

iii. ロドルフとボイラン

ロドルフとボイランはどう対応しているか。ふたりの共通点は、 独身で、 女の経験がた

くさんあり、裕福であることである (B 155, 159-60)。特に、ロドルフは、エマをはじめてみたとき「亭主はかしこくないな。細君はきつとうんざりしているんだ。—— (中略) ——あの女は恋にあこがれているんだ。二言三言、やさしいことを言ってやればのぼせあがってくるよ、きっと。...それはいいが、さてあとで切れるにはどうするか？」(B 159) と考えるような男である。

これに対して、ボイランの意識は読者には開示されていないが、ブルームの意識のなかで彼は、“Worst man in Dublin. That keeps him alive. They [women] sometimes feel what a person is. Instinct. But a type like that” (U 6.202-03)と描写されており、ロドルフのようなプレイボーイと考えて間違いなさそうである。

以上のことから、シャルルとブルーム、エマとモリー、ロドルフとボイランは、それぞれ類似点が多く、影響関係があるといえる。この影響関係を意識するならば、『ユリシーズ』は『ボヴァリー夫人』から物語や人物をうまく借用しつつ、妻が自殺するという筋立てをひっくり返して、喜劇仕立てとした物語といえる。『ボヴァリー夫人』は、『ユリシーズ』での不貞の妻と寝取られ亭主の物語について、おそらく最も重要な先行テキストとなっている。

II. 『アンナ・カレーニナ』と『ユリシーズ』

『アンナ・カレーニナ』は、社交界の尊敬と羨望を一身に受ける美貌の貴婦人アンナが、若い貴公子ウロンスキイとの恋のために家庭の幸福や社交界での地位を失い、最後はウロンスキイの愛さえも疑って孤独のうちに列車へ身を投ずるという悲劇である。三角関係は、アンナの夫カレーニン、アンナ、ウロンスキイが構成している。

i. カレーニンとブルーム

カレーニンとブルームはどう対応しているだろうか。カレーニンは、ブルームと似ているとは言えないが、正反対というわけでもない。

まず、社会的地位や人望の面では、まじめで有能な官吏であり、「聡明で、学識も深く、どこか崇高なところのある人だ」(A上112) とか「多少、保守的なところはあるが、立派な男だ」(A上112) と噂される人物である。アンナも、ウロンスキイとの恋がはじまるまでは夫の欠点には寛容で、夫を「あのひとはいい人だわ、誠実で、善良で、あの世界では優秀だし」(A上209) と考えている。このように、カレーニンは、社会的に成功していると同時に人望もある人物であり、これはしががない広告取りのブルームとはかなり違っている。ただし、人付き合いがそれほどよいほうではないらしく、親友とよべるような関係はなく、もっぱら妻との関係に満足していたというところはブルームを彷彿とさせる。

また、カレーニンは、妻の不貞に悩む夫の原型を『ユリシーズ』に提供していると考えられる。彼は、「嫉妬深いほうではなかった」(A上264) とされていて、外面的には平静を保っていたものの、内面では嫉妬心に苛まれている。そして、自分と同じ状況に置かれた良人たちの行動について思いをめぐらし、決闘や離婚の可能性についてあれこれ考える。

決闘は若いころカレーニンの心をとくに惹きつけたものだったが、それというのも彼が肉体的に臆病な人間で、自分でもよくそれを承知していたからだった。—— 中略 ——

たとえば、かりにわしが決闘を申し込むとする、——カレーニンは内心でそう考えつづけたが、申込んだあとですす一夜と、自分に向けられたピストルをまざまざと想像すると、思わず身ぶるいしてしまい、とても自分はこんなことはやるまい、と悟った、...

——中略——

熟慮のうえ、決闘を問題外としたあと、カレーニンは離婚ということを取上げた —— これは、彼の記憶にある良人たちの数人によって選ばれた第二の方法だった。 —— 中略 ——

離婚をしてみたところで、それはただ醜態をさらす裁判沙汰になって、敵側、つまり、彼の高い社会的地位を誹謗し、それをおとしめる側にとつての、みつけものになるのがおちだった。...のみならず、離婚してしまえば、いや、ただ離婚の手続きをしただけでも、妻はもう良人との関係を絶って、愛人と結ばれてしまうことは明らかだった。ところでカレーニンの内心には、自分では今やもう妻に対しては完全に軽蔑しきって、無関心でいるとおもっていたにもかかわらず、彼女に対して一つの感情が残っていた —— 彼女が誰はばかることもなくウロンスキイと結ばれることになることを、そしてその犯した罪がかえって彼女に有利になることを望まない気持ちがそれだった。(A中84-87)

このようにあれこれ妻の不貞への対処を思い煩うのはブルームも同じで、特に第17挿話の教義問答に次のように示されている。

What retribution, if any?

Assassination, never, as two wrongs did not make one right. Duel by combat, no. Divorce, not now. Exposure by mechanical artifice (automatic bed) or individual testimony (concealed ocular witnesses), not yet. Suit for damages by legal influence or simulation of assault with evidence of injuries sustained (selfinflicted), not impossibly. Hushmoney by moral influence, possibly. If any, positively, connivance, introduction of emulation (material, a prosperous rival agency of publicity: moral, a successful rival agent of intimacy), depreciation, alienation, humiliation, separation protecting the one separated from the other, protecting the separator from both. (U 17.2200-09; my emphasis)

この問答での決闘と離婚への言及は、一般的なものかもしれないが、カレーニンの悩みを深層に隠しているとも読める。こうしてみると、カレーニ人とブルームは、特に似ているというほどのものではないものの、全く無関係というわけでもなさそうである。

ii. アンナとモリー

では、アンナとモリーはどう対応しているのか。ふたりは罪の意識の有無において好対照をなしている。ウロンスキイとの関係が一線を越えてしまった直後のアンナは、激しく罪の意識に苛まれる。

—— 神さま！ わたくしをおゆるし下さい！ —— 彼女は彼の両手を自分の胸に押しつけて、泣きじゃくりながら、そう言った。

アンナはもはや己れを低くして赦しを乞う以外に残されたみちはないほどに自分を罪ぶかい、わるい女だと感じていた。(A上278)

この罪の意識は、その後もずっと薄れることはなく、彼女の内面では「自分は悪い女だ」という意識が何度も繰り返される。これは、借金苦のために自殺したエマとも、また罪の意識とはほとんど無縁のモリーとも違っている。このように、アンナとモリーは罪の意識の有無において非常に対照的な人物となっている。

iii. ウロンスキイとボイラン

ウロンスキイとボイランはどうか。ウロンスキイは、妻の愛人となっている人物としては特殊な存在で、内面の心理描写が夫や妻にもおとらずに描かれている。ウロンスキイとボイランを比較してみると、アンナと出会う前の、公爵令嬢と婚約寸前までいった彼にはプレイボーイの面もあるが、アンナとの恋愛においては、うって変わって情熱と真剣さが感じられる。

彼にそのすべてを捧げつくした上で、将来のことは一切どうなるうとも、自分の運命の決定を彼ひとりにだけすがっているアンナのいじらしさに彼はいつか引きずられてしまって、二人の関係は早晩おしまいになるというような、あの当時の考え方はもうとうにやめてしまっていた。一身の栄達を願う彼の計画はふたたび背後に退けられ、彼は万事がきちんと規定されている活動圏内から自分がはみ出てしまったことを感じながら、全身を己れの感情に委ねた。(A中224-26)

ウロンスキイは出世を棒に振るだけではない。彼は、アンナとカレーニンとの三角関係のなかで苦しんだあげく、未遂におわるもののピストル自殺さえ図る (A中340-42)。また、アンナと自分の関係を、離婚と結婚によって正式なものにしようという願いも、アンナよりはむしろウロンスキイのほうが強いほどで、この点からも彼の真摯さが伺える。

さらに、物語の最後で、アンナの自殺によって打ちのめされた彼は、義勇兵に志願するが、このとき自らを「武器としてはわたしもなにかのお役に立てるかもしれませんが。ですが、人間としては、わたしは廃残の身です」(A下434)と自嘲気味に語る。アンナとの恋愛において、彼女にまさるともおとらず情熱的に生き、また傷ついたとも言えるウロンスキイは、プレイボーイタイプのボイランとは対極の存在である。

このように、ブルームにカレーニンのほのめかしを読み取ることは可能であるのに対して、アンナはモリーと、ウロンスキイはボイランと、それぞれネガとポジの正反対の関係にある。『ボヴァリー夫人』と『ユリシーズ』の場合、物語は悲劇から喜劇へと転換しているものの、二つのテキストにおける夫、妻、妻の愛人は、それぞれ興味深い類似性を示している。これに対して、『アンナ・カレーニナ』と『ユリシーズ』の場合は、妻と妻の愛人がそれぞれ対照的な対応関係にあり、われわれはこの落差を認識することが重要である。

以上の分析から、『ユリシーズ』が『ボヴァリー夫人』と『アンナ・カレニナ』に如何に多くを負っているか、少なくとも『ユリシーズ』の物語構築の重要な要素の一部が如何にこれらの小説の中心的主題を修正的に反復することで成り立っているか、が明らかである。二つの小説は、それぞれに『ユリシーズ』の無視できない先行テキストとなっていて、その変容の様態は、単なる諧謔的なパロディのレベルに留まるものではなく、そこにわれわれは人間関係の根源にかかわる転覆的な変容の力を認めることが出来る。『ユリシーズ』の革命性を十分に説明するためには、パロディによるこの変容の力を見逃すわけにいかないのである。

III. 『ユリシーズ』の革命性

最後に、『ユリシーズ』が19世紀姦通小説に対してやったことの意味を、物語展開に注目して考察する。『ユリシーズ』はパロディ化により姦通小説をどう変化させたのか。冒頭にあげた『ボヴァリー夫人』と『アンナ・カレニナ』に共通する点を再度挙げる。共通点は、第一に、結婚生活に問題があること、第二に、姦通が一時的には結婚の問題を解決するように見えること、第三に、最終的には姦通も結婚の問題の解決にはならないこと、第四に、妻の不貞行為の代価が彼女自身の悲劇的な死であること、である。これらの点は、『ユリシーズ』ではどうなっているだろうか。

答えは二つある。ひとつは、第四の点——妻の不貞行為の代価が彼女自身の悲劇的な死であること——がラディカルに変容し、『ユリシーズ』においては、不貞を犯したモリーが死ぬことがないばかりか、彼女に罪の意識すらない、ということ。つまり、不貞の罰とも見える妻の悲劇的な死は、罪意識から解放された妻の陽気で幸せな生へと転換しているのだ。このように、夫、妻、妻の愛人の三角関係において、不貞の妻が死ぬことで問題が解決し物語も完結するというような19世紀のシナリオは、20世紀の『ユリシーズ』の世界ではもはや通用しない。

もうひとつは、『ユリシーズ』の世界は、第二の点——姦通が一時的に結婚の問題を解決するように見える地点——を通り越して、最初から第三の点——姦通も結婚の問題の解決にならないことがすでに理解されている地点——に到達しており、そこでは、姦通に情熱や問題解決の力がないばかりでなく、結婚ももはや清純でも正当でもなくなっている、ということである。つまり、情熱の失われた姦通は結婚の退屈さに近づく一方、結婚は不純物が混入して姦通の不純さに近づいているという、体制側からすれば誠に不穏な事態である⁷。このように、『ユリシーズ』では、19世紀の姦通小説におけるような意味での結婚も姦通も成立せず、これらがほぼ等価なものとして並存している。このことは、『ユリシーズ』の終結部で、モリーが今後ブルームと仲直りするのか、ポイランとの関係を続けるのか、それともスティーヴンと新たな関係を結ぶのか、について明確な答えが出されていないことに象徴的に示されている。

以上二つの意味で、『ユリシーズ』は、19世紀姦通小説の息の根を止めてしまったといえる。言語や小説技法の点で『ユリシーズ』が革新的なのは勿論だが、この小説は、19世紀姦通小説をパロディの対象とすることによって、そこに描かれた結婚と姦通の意味作用をラディカルに変えてしまったのであり、この点において物語レベルでの革命性も明らかである。

- * 本稿は2008年6月14日(土)、青山学院大学において行われた日本ジェイムズ・ジョイス協会第20回研究大会での発表原稿に加筆・修正を施したものである。なお、本稿の議論の一部が *Joycean Japan* 第20号(日本ジェイムズ・ジョイス協会:2009年6月)に研究ノートとして掲載されている。
- * 使用テキスト
 James Joyce. *Ulysses*. Ed. Hans Walter Gabler et al. New York: Vintage Books, 1986.
 フローベール 生島遼一訳『ボヴァリー夫人』東京:新潮文庫、1965年。
 トルストイ 中村融訳『アンナ・カレーニナ』上・中・下 東京:岩波文庫、1989年。
 なお、引用箇所は、本文の括弧内にそれぞれ、(U挿話番号 行数)、(B頁数)、(A上/中/下 頁数)と示す。

注

- ¹ 『ユリシーズ』の革命性をどう説明するかは多くの研究者の関心事であったが、二つの画期的な業績を挙げるにとどめる。Hugh Kenner, *Flaubert, Joyce and Beckett: The Stoic Comedians* (Boston: Beacon P, 1962); Colin MacCabe, *James Joyce and the Revolution of the Word* (London: Macmillan P, 1979).
- ² 『ユリシーズ』の『オデュッセイア』との並行関係は、T. S. Eliot, "Ulysses, Order and Myth," *Dial*, lxxv (November 1923), 480-83; Stuart Gilbert, *James Joyce's Ulysses* (New York: Vintage Books, 1955); Richard Ellmann, *Ulysses on the Liffey* (London: Faber and Faber, 1972)を参照。
- ³ Tony Tanner, *Adultery in the Novel* (Baltimore: The Johns Hopkins UP, 1979), 11-14.
- ⁴ Edward Saidの造語。Tanner 14を参照。
- ⁵ 『ボヴァリー夫人』と『アンナ・カレーニナ』を『ユリシーズ』の先行テキストと考えることの妥当性については、Richard Brown, *James Joyce and Sexuality* (Cambridge: Cambridge UP, 1985), 22を参照。
- ⁶ Frank Budgen, *James Joyce and the Making of 'Ulysses' and Other Writings* (Oxford: Oxford UP, 1989), 184.
- ⁷ 『ユリシーズ』において結婚と姦通の境界線が消えた、というここでの私の議論は、タナーが、*Adultery in the Novel*において『ボヴァリー夫人』を論じた第4章(233-367頁)の議論から大きな示唆を得ている。タナーは、結婚と姦通の境界線が消えつつあることを、すでに『ボヴァリー夫人』の中に鋭く読み取っていて、彼の立場をとるならば、『ボヴァリー夫人』と『ユリシーズ』の距離は、本論での議論よりもずっと近いことになる。また、タナーは、この境界線の消滅について、『ユリシーズ』には特に言及していないものの、John Updikeの *Couples* (1968) を例としてとりあげ、現代文学の傾向として説明している(89頁)。私としては、彼の議論に多くを負いながらも、特に『ユリシーズ』こそが境界線の消滅を決定的にしたことを明らかにすることで、タナーの議論を発展させたつもりである。